

安政三年丙辰新鐫
 輕騎加刺別印姿制手前編
 披雲館藏板



岡田氏
印

西洋

郡主ノ馬
トゴ、テイ、マン



波爾斯亞



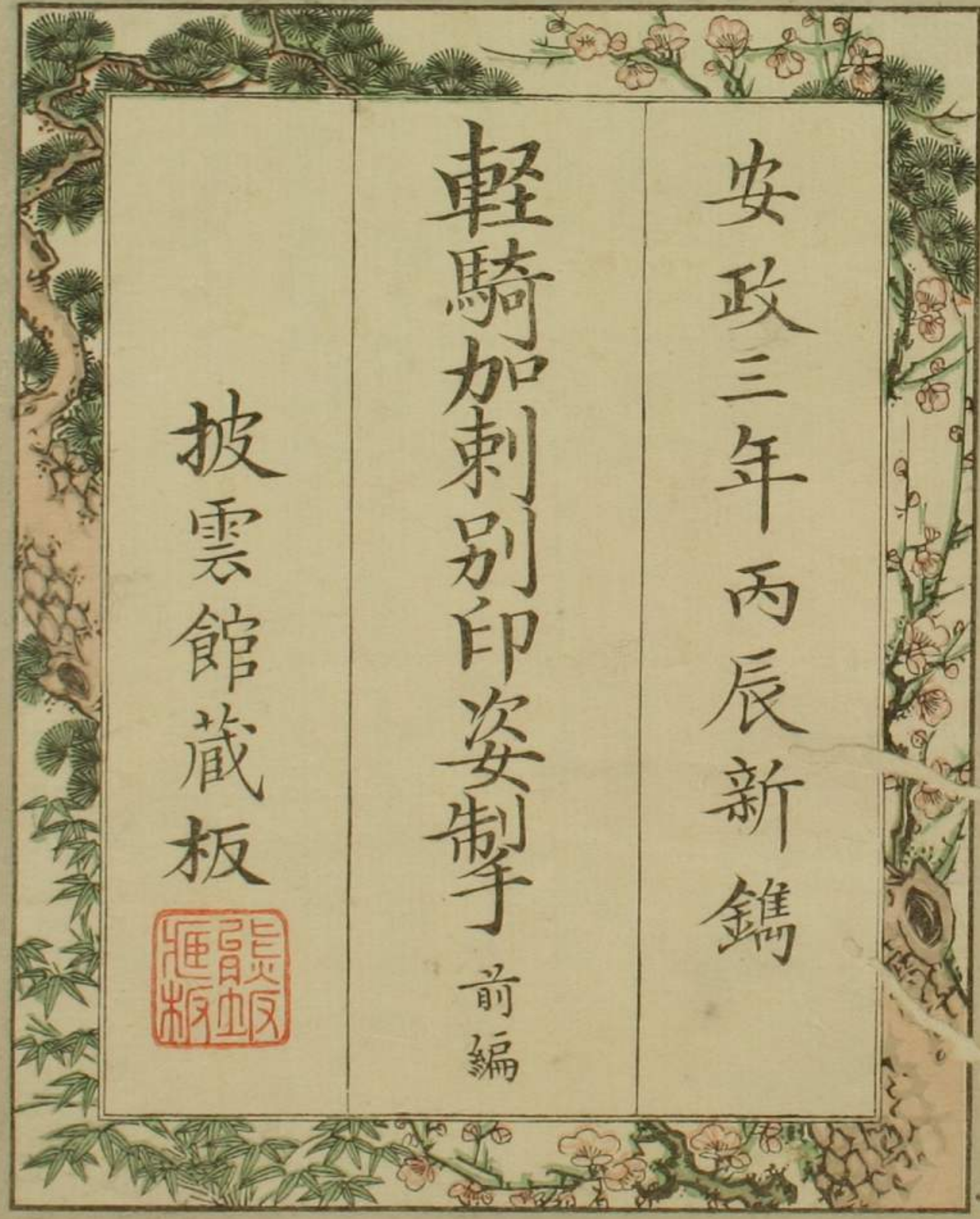
西洋
鞍馬
カウチ



安政三年丙辰新鐫

輕騎加刺別印姿制等 前編

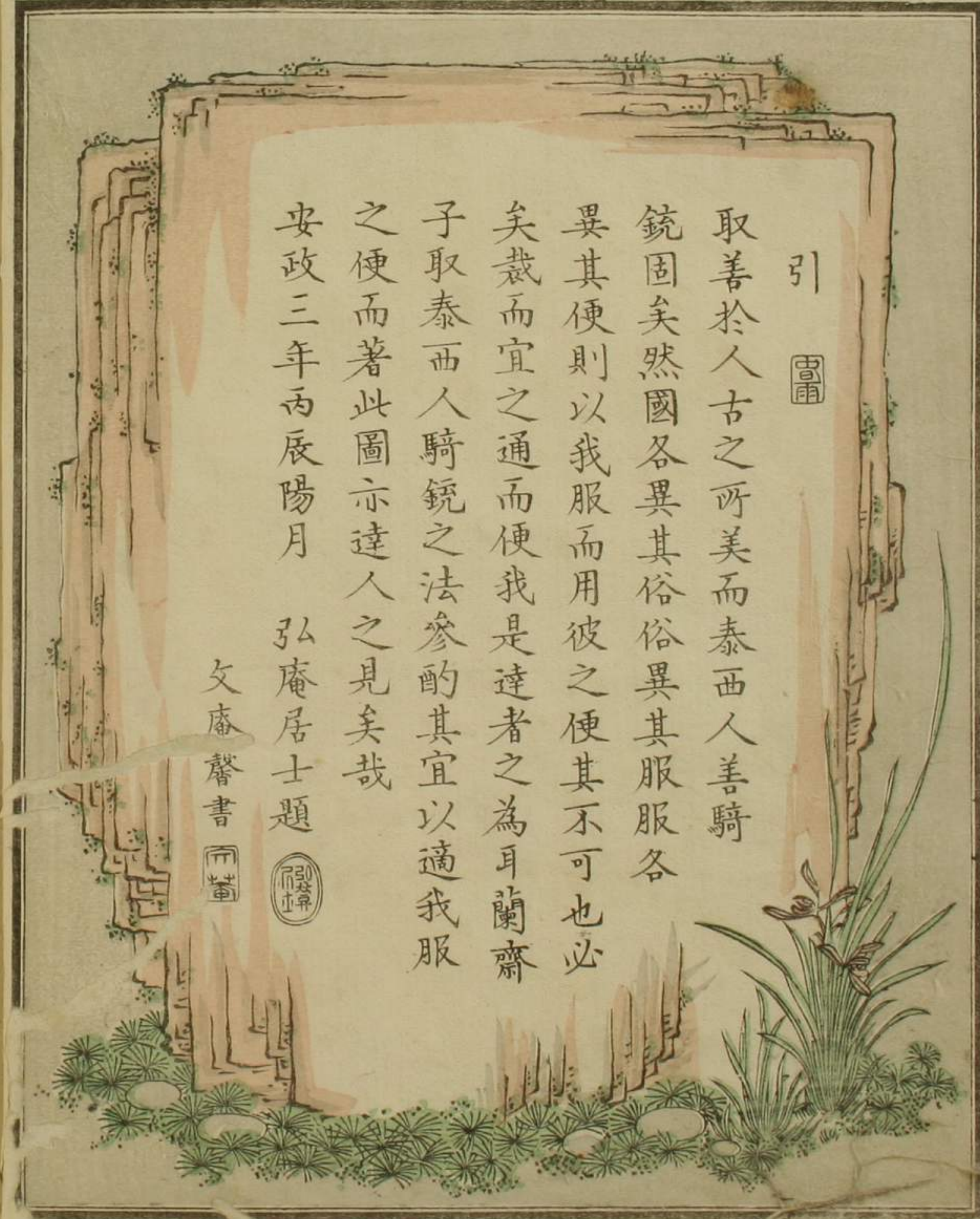
披雲館藏板



引圖

取善於人古之所美而泰西人善騎
 銃固矣然國各異其俗俗異其服各
 異其便則以我服而用彼之便其不可也必
 矣裁而宜之通而便我是達者之為耳蘭齋
 子取泰西人騎銃之法參酌其宜以適我服
 之便而著此圖亦達人之見矣哉
 安政三年丙辰陽月 弘庵居士題

文庵馨書



騎士初動作第一圖
 一馬頭ヲ背ニ致
 シ馬頭ヲ距ル
 一歩ニノ馬前
 ニ立チ右ノ馬
 韁兩條ノ間ヲ
 ヨリ穿チ入ルハ



騎士初動作第二圖
 右方ノ韁ノ上ニ
 交又シ右ノ手
 ヲ以テ其兩條
 ヲ滿掌ニ束把
 スルノ形樣タリ



騎士初動作第三圖
 滿掌ニ束把シ韁
 ノ端シヲ六寸拳
 ノ外ニ出シ心窩上
 ニ安貼スル形樣



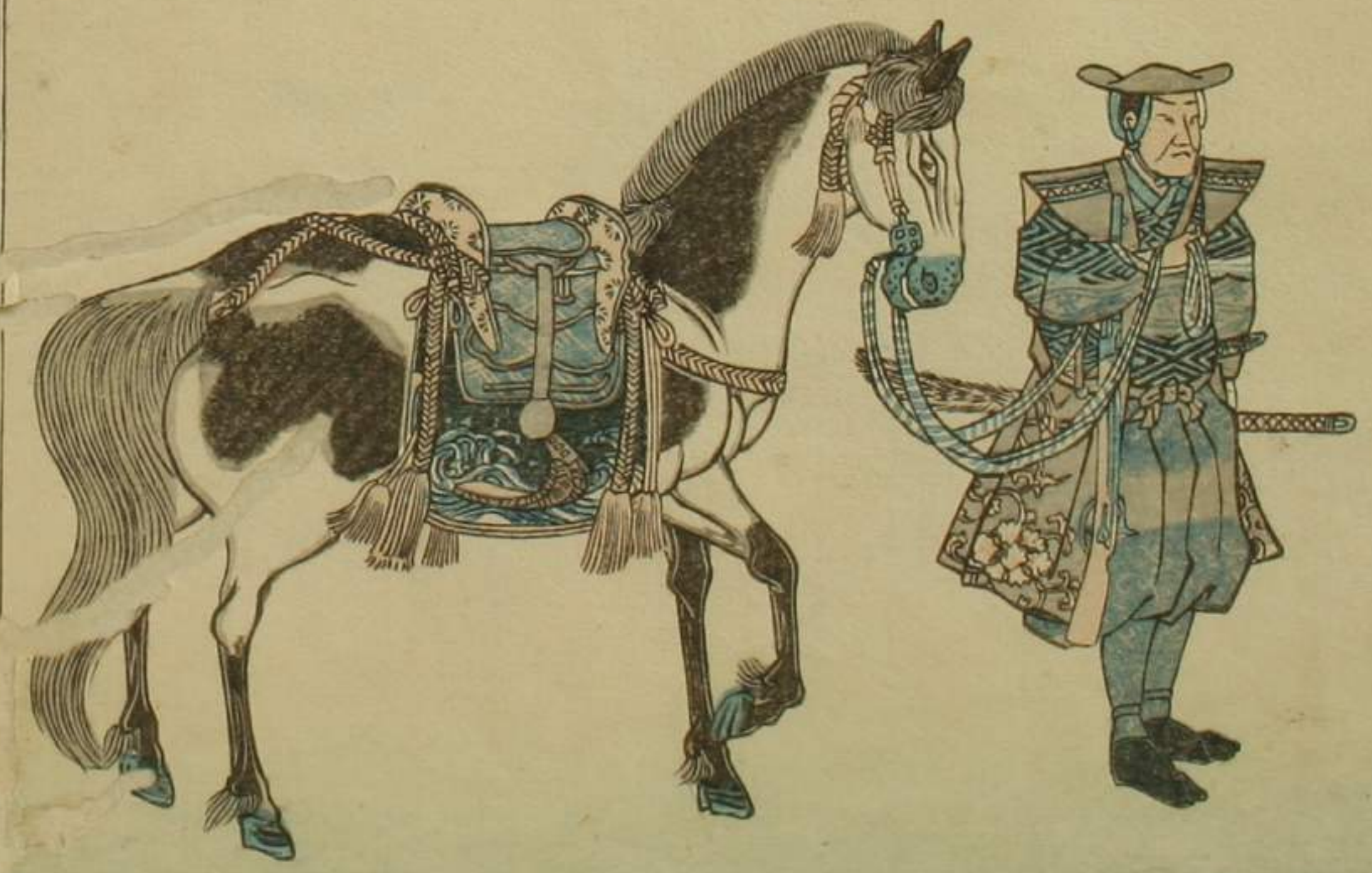
第一圖





第五動作ノ圖

○韉ノ効用
 ○右方左方上馬韉ノ効用ヲ示ス但シ後學ノ童蒙ヲノ了解シ易キヲ欲シ圖說ヲ左右ニ別ツ其圖說共ニ相同シ唯左右ニ變換スルヲ異ナリトス
 ○右方ノ上馬ハ韉ノ効用右手ニ掛レリ左方上馬ノ韉ハ又左手ニ掛レリ



第二圖

其法微兩足尖ヲ舉テ左轉背面向ノ爲スヘシ
 ○第二動作ハ輕騎銃ヲ以テ肩ヲ超ヘテ背後一擲ケ送ル狀ヲ扮裝シ左手ヲ以テ兩韉端ヲ握リ其諸指甲ヲ下ニ向ケテ右手ヲ以テ馬口ヲ距ル一六寸ニノ韉ノ兩條ヲ束把シ其拇指ヲ馬頭ニ向ケシム
 ○第三動作ハ左手ヲ舉ケ韉ノ兩條ヲ以テ先ツ馬ノ左ノ耳ヨリ穿チ納レ馬頭ヲ超テ運ヒ致シ其拇指ヲ以テ韉ノ兩條ヲ分疏シ其諸指甲ヲ下ニ向ハシム
 ○第四動作ハ左足ヨリ步ヲ起シ進ムル一ニ步ニメ馬ノ右肩ニ對向シ左足尖ヲ以テ右轉向ヲ爲シ之ト一齊ニ韉ノ兩條ヲ固把メ放縱スル一ナク左踵ヲ引テ右踵ニ附接
 ○第五動作ハ左手ヲ以テ其膈ノ長サニ盡シ之ヲ起シテ韉ノ兩條ヲ舉ケ右手ヲ馬頭上ニ滑汰シ送り其季指ヲ韉ノ兩條ノ間ニ挿入シ他ノ四指ヲ以テ韉ノ兩條ト共ニ鬣毛ヲ把ル一握リ

○第六動作ハ右手ヲ以テ韁端ヲ放テ其臂ヲ馬脊ニ貼ケ其手心ヲ胛上ニ安妥ス
 ○此ニ於テ左ノ令ヲ下ス

騎上シ 座セヨ 一勢節二動作タリ

○第一動作ハ兩掌ヲ杖テ飄然トメ身體ヲ浮揚ノ直立シ
 下身ヲ馬肩ノ高サニ舉クヘシ

○第二動作ハ左脚ヲ伸シ馬ノ臀ニ觸ル、一ナクメ之ヨ
 リ回ラシ軟ト馬脊ニ騎座スヘシ

○附考此ニ於テ輕騎ハ其輕騎銃ヲ降下スル狀ヲ扮装スヘシ

○馬上騎士ノ姿制

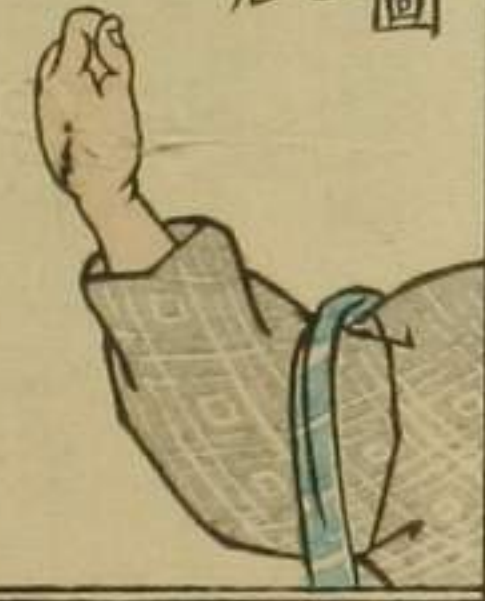
○頭首ヲ將テ寬ニ昂隆シ直立メ兩肩ヨリ離レ抽ク

○雙肩ヲ垂レテ後ヘニ引キ胸ヲ正リ兩腰ノ懸遊セシメ

○兩肘ヲ常態ニ下垂スヘシ

○兩臀ヲ齊ク馬脊ニ座着シ下身ヲ正ニ進メ腰ノ直立メ

致騎 初動 馬背 第一圖
 一歩 馬頭 距離
 前立 兩條 穿入
 下韁 兩條 穿入



騎 初動 右方 第二圖
 方ノ 右ノ 上方
 手ヲ 交テ 其ノ
 條ヲ 以テ 其ノ
 把ヲ 滿テ 其ノ
 形ニ 掌ニ 其ノ
 樣東 樣東 樣東



騎 初動 兩條 第三圖
 端ノ 掌ニ 把ニ
 外ニ 出シ 束ニ
 樣ニ 上シ 心ニ
 安ニ 上シ 心ニ
 形上 形上 形上



第三圖



第五動



運轉自在他ノ支柱ヲ
籍ラス獨リ騎士自己
身上ノ重カニ憑テ其
姿制ヲ保固メ頽サス
○雙股ハ左右齊ク馬
脊ヲ狹ミ跨リ股根ヨ
リ膝ニ至ル迄股ノ平
面ヲ照シ守リテ之ヲ
轉振シ唯兩股ト雙脚
ノ自己ノ重刀ノ趣ク

第四圖



所ニ信セテ兩股ヲ伸スヲ要ス○兩脚會ハ緊固ナルヲ要ス
○兩脚ハ懸遊ノ常態ニ下垂スヘシ
○ウーテル、テレンスノ韁ハ雙手及之ヲ把、諸指ヲ拳屈
シ、拇指ヲ伸シテ各韁條上ニ安妥ニ兩拳ヲ臂ノ高サニ舉
ケ致シテ能ク固定シ兩舉相開キ距ル一六寸ニノ左右ノ
諸指相對向スヘシ
○ウーテル、テレンスノ韁ヲ長縱スルノ法

○其令ヲ下ス一左ノ如シ
意ヲ着ケヨ 長縱セヨ 韁ヲ一勢節二動作タリ
○第一動作ハ左韁ヲ長縱スルニハ右手ノ拇指ト食指ヲ
以テ左拳ノ後ヘニ當ツテ左韁ヲ併セ把リ兩拇指ヲ前
後ト相對向セシムヘシ
○第二動作ハ左掌ヲ洞開シ左韁ヲ掌裡ニ滑汰シ縱メテ
兩舉相接附スルニ至リ嗣テ左掌ヲ閉拳シ其韁適宜ニ長
縱シ定マリテ兩手ヲ分チテ其本位ニ復ス

○右韁ヲ短縮スルニハ上ニ相反スル法ヲ照シ行フヘシ
 ○ウーテルテレンスノ韁ヲ短縮スル法
 ○其令ヲ下ス一左ノ如シ

意ヲ着ケヨ 短縮セヨ 韁ヲ 一勢節二動作タリ

○第一動作ハ右手ノ拇指ト食指ヲ以テ左拳ノ後ヘニ當

ツテ左韁ヲ併セ把リ兩拇指ヲメ前後ニ相接次セシムヘシ

○第二動作ハ左掌ヲ洞開シ其韁ニ沿テ其掌裡ヲ滑汰シ

送り兩掌相隔絶スル一二三寸ニ至リ左掌ヲ閉拳シ其韁

適宜ニ短縮シ定マリテ兩手ヲ分チテ其本位ニ復ス

○右韁ヲ長縦スルニハ上ニ相反スル法ヲ照シ行フヘシ

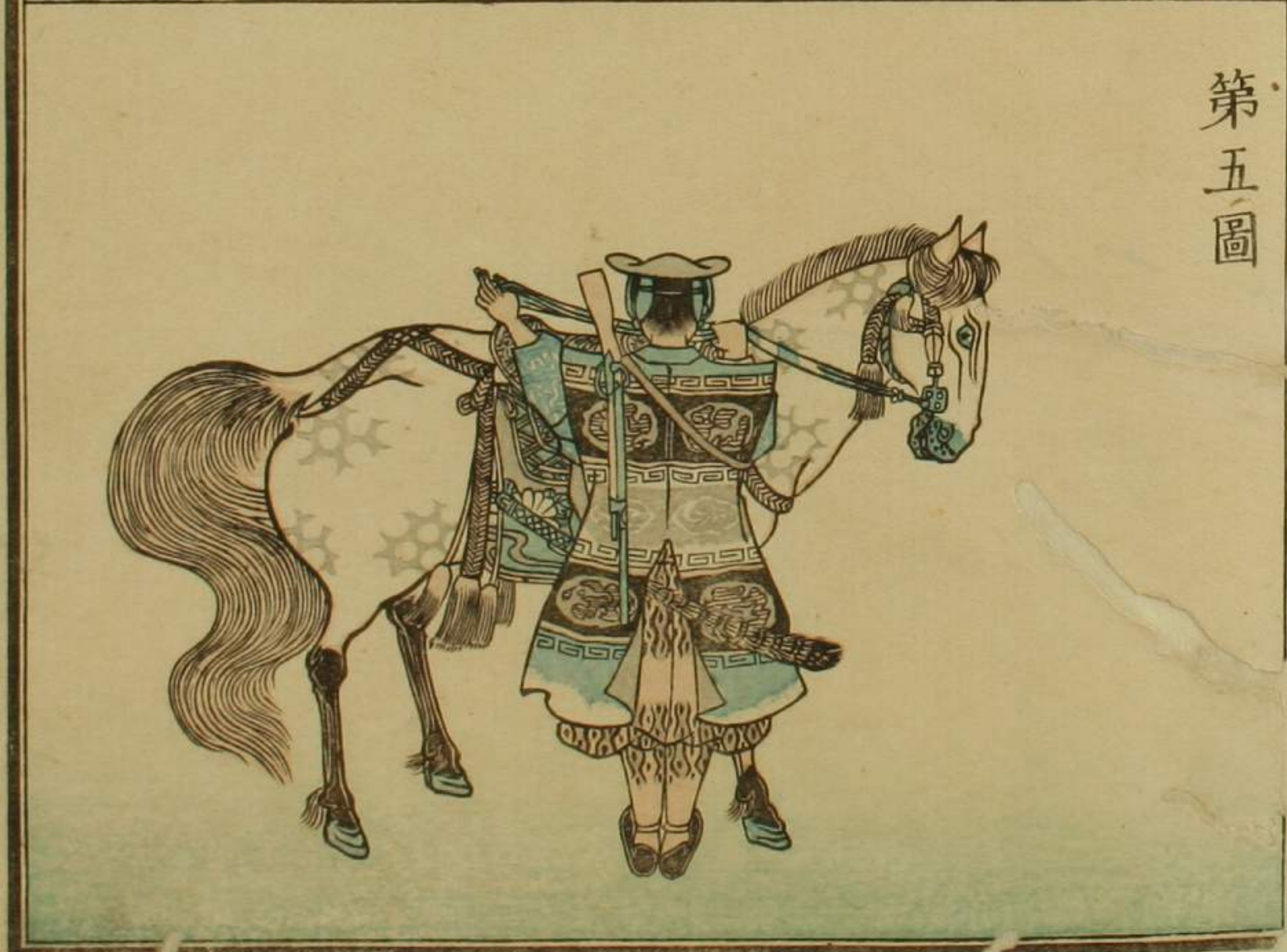
○左手ニ韁ノ兩條ヲ交叉シ把ルノ法

其令ヲ下ス一左ノ如シ 韁ノ兩條ヲ交叉シ把レ 凡手ニ

一勢節二動作タリ 第一動作ハ左拳ヲ微轉回シ右韁ノ左掌ニ交叉シメテ

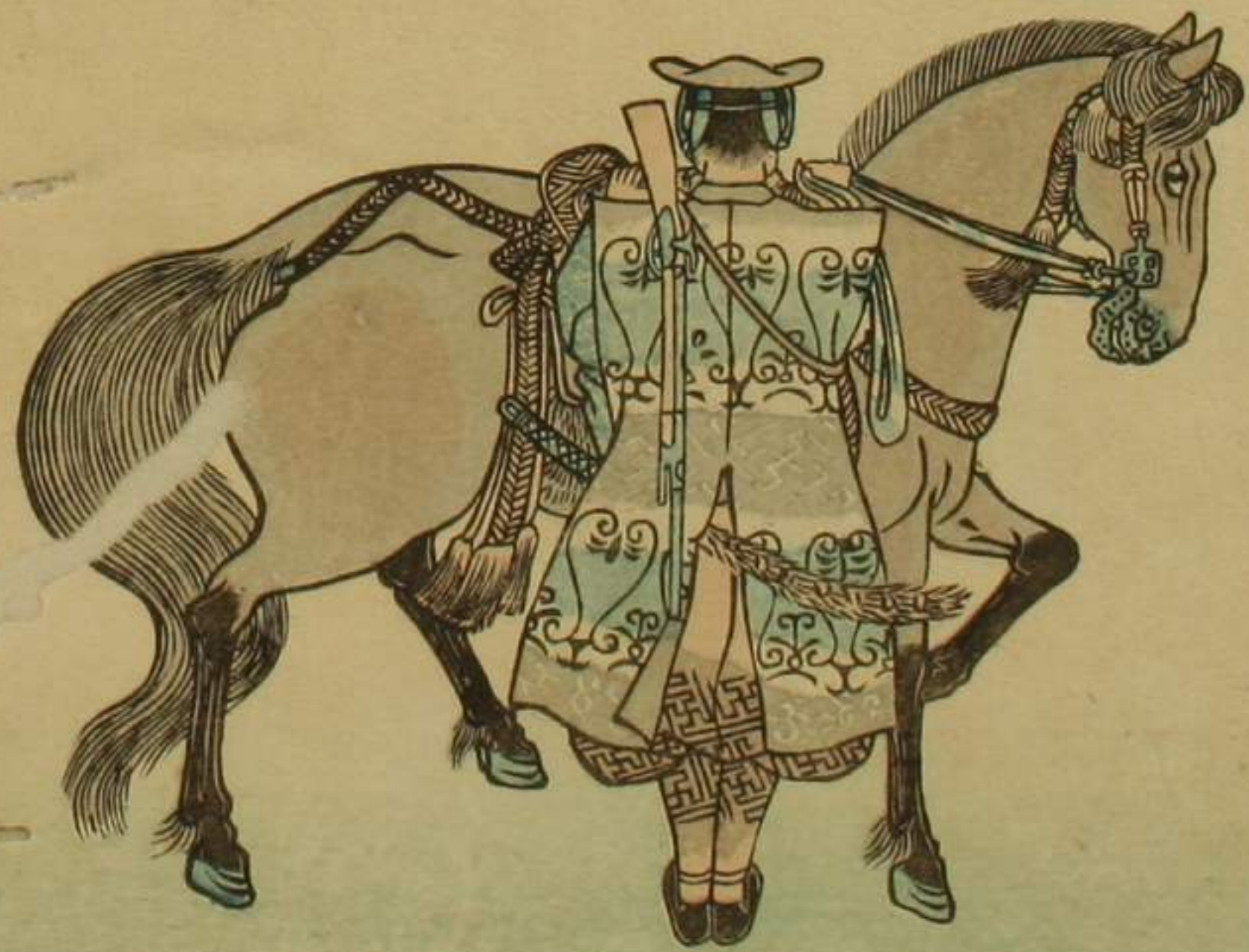
第五圖

下ニ交叉シ把リ右韁
 ノ後端ヲメ左掌ヨリ
 其季指ノ側傍ニ流シ
 出サシムヘシ
 ○第二動作ハ右手ヲ
 脇肋ニ下垂ス
 ○韁ノ兩條ヲ雙手
 ニ分チ把ルノ法
 ○其令ヲ下スノ左ノ
 如シ
 意ヲ着ケヨ 分チ
 把レ 韁ノ兩條ヲ
 一勢節一動作多
 ○第一動作ハ右手ヲ
 以テ右韁ヲ把リ兩拳



第六圖

相開キ距一六寸ニメ
 右手ヲ其本位ニ復ス
 ○右手ヲ以テ韁ノ
 兩條ヲ交叉シ把法
 ○其令ヲ下ス一左ノ
 如シ
 意ヲ着ケヨ 韁ノ
 兩條ヲ交叉シ把レ
 右ノ手ニ
 一勢節ニ動作タリ
 ○第一動作ハ右手ヲ
 微轉回シ左韁ヲ右手
 ニ交附メ右韁下ニ交
 又シ把リ左韁ノ後尾
 ヲ右掌ヨリ其季指



第七圖

○令辭ノ第一節
 按スルニ準備セヨ
 ト唱フル一節ヲ云
 ニ於テ韁ノ兩條ヲ左
 手ニ交ヘ把リ右手ヲ
 脇肋ニ搬ビ致シ輕騎
 銃ヲ把ル動作ヲ施行
 シ之ニ嗣デ右肩前ヲ
 距ル一尺ニメ銃ヲ
 肩頭迄高擧ス
 第一動作ハ令辭ノ第
 二節
 下ト唱ル一節ヲ云
 ニ於テ其銃ヲ右肩後
 へ擲ゲ掛ケル動作ヲ



行ヒ左手ノ四指ヲ緊
合メ鬚毛ヲ握リ其拇
指ヲ食指ノ第二節ニ
伸シ致ス

○第二動作ハ右手ヲ
馬ノ脚上ニ安シ其拇
指ヲ左方ニ向ケ他ノ
四指ヲ外面ニ向シム
下リヨ馬ヨリ

一勢節三動作タリ
○第一動作ハ兩掌ヲ
杖テ身ヲ起シ右脚ヲ
伸シテ馬臀ニ觸ル、
ナク此ヲ超ヘテ退
却シ嗣テ右股ヲ左股

第八圖



第九圖

ヲ聽テ兩足尖ヲ少舉
ケ左轉背面向ヲ爲ス
○第二動作ハ輕騎銃
ヲ把リ肩ヲ超ヘテ背
後ニ投スル式ヲ爲シ
韁ノ兩條ヲ左臑上ニ
滑汰シ任ノ臑鎖ヲ鈎
ヨリ脱シ靶ヲ解キ去
ル動作ヲ爲シ嗣テ左
手ヲ以テ駒銜ノ左方
ノ約頰革ヲ把リ以テ
馬ヲ固駐セシム
○第三動作ハ左手ヲ
以テ指甲ヲ起シ馬口
ヲ距ル一六寸ニメ韁



ノ兩條ヲ束ツク把トルス
 ○第四動作ハ左手ヲ以テ右手下ニ近接シ韁ノ兩條ヲ取トテ右手ヲ放ボテ左手ノ指シ甲ウヲ下ニ向テ韁ノ兩條ヲ端末迄脱ス汰ラシ住トム
 ○第五動作ハ左手韁ノ兩條ヲ固把ツメ放ハス
 一ナクメ其手ヲ脇キ肋ロニ附ツケテ左轉ス
 ○行進之法
 ○此令ヲ聽テ韁ノ兩條ヲ固持カタメ放ハテ左手ヲ托ツ銜ハ肉ケノ邊圍ヘニ

第十圖

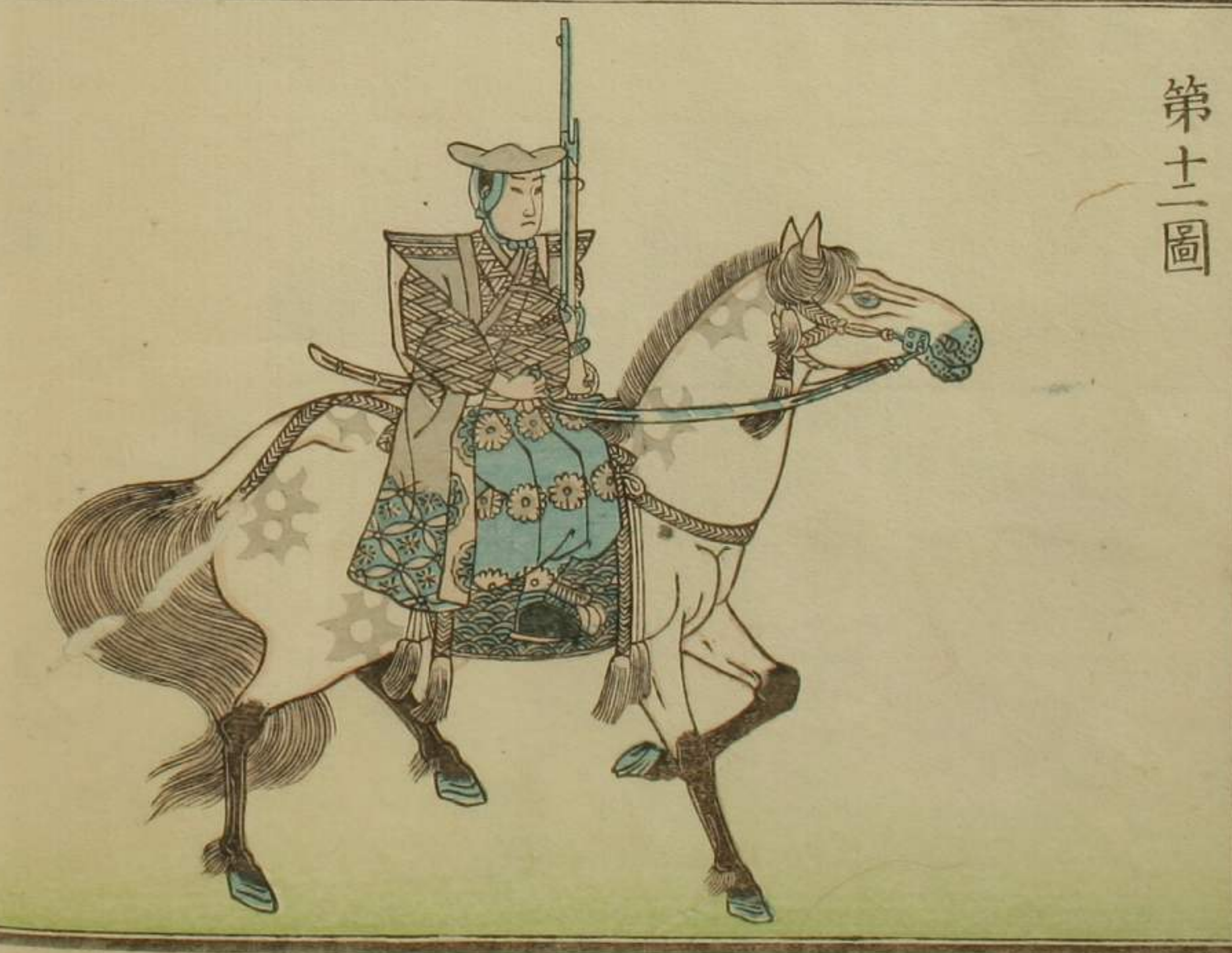


以テ兩韁ノ端ヲ把トルリ
 第二次ニ於テハ前章既ニ説セ示シセル如ク右臑カヲ韁ノ兩條ノ間ニ穿ツテ通シ第三次即チ原向正面向ニ復スルニハ左手ヲ以テ右手下ニ於テ韁ノ兩條ヲ把テ其左手ヲ心窩上ニ安貼ヤスル宛マモ馬ニ上ル前施行スル法ノ如ク爲スヘシ但シ輕騎ハ此時尚輕騎銃ヲ放ハスル式ヲ爲シ右手ヲ脇キ肋ロニ浴ソテ下

第十一圖



垂シ貼クヘシ
○左方ニ馬ヲ轉シ歸ルニハ已ニ其五種ノ動作ヲ施行シ了リタル後復タ原向正面向ニ復スルニハ右方ニ旋回スル一次ニメ定レリ其法韁ノ兩條ヲ左手ヨリ放チテ其手ヲ韁ノ兩條ノ間ニ穿チ通シテ其端ヲ把テ其手ヲ心窩上ニ安貼シ兼テ輕騎銃ヲ下垂スル式ヲ爲シ右手ヲ脇助ニ浴テ下垂シ



輕騎加刺別印附録

○稚馬ヲ教習スル教條ノ經級進奥ノ要法
○稚馬ヲ教習スルニハ其人極メテ氣ヲ殺シテ馬ノ性ニ縦極メテ温和之ヲ愛憐ノ聊カ其威カヲ凌轉セント欲セサルヲ要ス唯肝要許スヘカラサルノ極ニ至ツテ攻浴ヲ加フルノミ

○放習スル馬ニハ

ノ粗ナル	及咬鼻子	ウー	テ	ル	テ	レ	ン	ス	按	ス	ル	ニ	ハ	騎	馬	ノ	性	ニ			
者ノ名	如キ鐵器	ヲ	靴	上	ニ	ニ	テ	ハ	攻	浴	ス	ル	ニ	ハ	騎	馬	ノ	性	ニ		
ケルヲ牽	テ攻浴	ハス	ル	ヲ	靴	上	ニ	ニ	テ	ハ	攻	浴	ス	ル	ニ	ハ	騎	馬	ノ	性	ニ
ケルヲ牽	テ攻浴	ハス	ル	ヲ	靴	上	ニ	ニ	テ	ハ	攻	浴	ス	ル	ニ	ハ	騎	馬	ノ	性	ニ

○騎士緊行ノ替リニ驟行セシムルニハ駒韁ヲ把ルノ放師輕ク咬鼻子ヲ振掉スルヲ要ス但シ斯ノ如キ振掉ノ法ハ之ヲ水平ニ施行スルヲ要ス直立ノ之ヲ行ヲ禁ス

○騎馬後ヘニ向ツテ踏ル尺ハ謹シテ鞍座ヲ固メ身體ヲ

寛裕ニ少仰々之ト一齊ニ兩脚ヲ近迫ノ馬ヲ前進セシ
メ本韁ヲ緊牽メ馬頭ヲ脚間ニ俯シ入レルヲ防禦スル
ヲ要ス

○走馬將ニ後ヘニ向ツテ踢ント欲スルキハ其前脚ノ運
動弛懈スルヲ以テ輒チ之ヲ悟リ知ルヘシ又其將ニ騰
立セント欲スルキハ其後脚ノ運動弛懈スルヲ以テ輒
チ之ヲ悟ルヘシ

○稚馬ヲノ武器ノ閃動銃火挑戰ノ騷鬧鳴動ニ慣習
セシムル法

○馬ヲノ點放ニ慣レシムルニハ厩ノ戶外ニテ本騎銃ヲ
點放スルヲ要ス但シ其間時ニ燕麥ヲ與ヘテ其身心ヲ
靖壯ニスヘシ

○此他稚馬ニ第六教節ヲ教習スルニモ亦點放ニ慣レシ
ムヘシ其法此部局ヲ鄉導スル長官ニ無彈銃包子ヲ授
ケシム長官之ヲ採テ其本騎銃ニ裝初ノ開濶セハ調馬

場ニ於テ點放シ復演精熟馬逐時之ニ慣習メ身心益ニ
靖定スルニ從ヒ其長官身ヲ轉シ纏ツテ其調馬場ヨリ
厩ニ向ツテ之ヲ打放ノ愈ニ之ニ慣熟セシムヘシ

○稚馬ヲノ點放ニ慣習セシムルニハ須ク注意メ初メノ
間ハ逐次點放ノ間ヲ少弛メ其漸ク之ニ慣習メ身心靖
定スル度ニ從ヒ亦漸ク短急ニ之ヲ連發スベシ

○騎上ノ枝藝モ亦稚馬放習掌職ノ騎士ヲ以テ之ヲ慣習
セシムヘシ又稚馬十分ニ武器ノ閃動鳴響ニ慣ルキ
ハ騎士之ニ騎座ノ躬親ラ其銃ニ裝藥メ之ヲ連放スヘ
シ但シ逐次點放ノ間隙ヲ弛メ其馬ヲ靖定セシムヘシ

○凡此慣銃ノ教習ハ極メテ慎謹ヲ要スルヲ以テ其馬之
カ爲ニ畏怖ノ安靖セサルキハ輒チ之ヲ休メテ其身心
ヲ靜養セシメ又其馬ヲノ驚駭セシメテ馬ノ之ニ慣習
スルヲ要スル閃動鳴響ヲ行フノ久暫劇軟モ亦唯其馬
身ニ感動セシムルノ強弱ニ從テ之ヲ斟酌増減スヘシ

○雅馬ノ騎兵一束任ヲ编制ノ點放ノ法ヲ教習セント欲スルニ其隊内ニ十分畏怖ナル怯馬アリテ之カ爲ニ連累セラレ始終束伍中ニ錯亂ヲ生セ令ントスルハ則其教習ニ先タテ之ヲ拔テ厩ニ送り返シ燕麥ヲ與ヘツ郡ニ離レテ特別ニ朝暮徐ニニ武器ノ閃動鳴響ニ慣レシムルヲ要ス

○此ニ於テ其怯馬浸神定リ氣剛固ナルニ至ルハ手ヲ以テ之ヲ演武場ニ牽出シ燕麥ヲ與ヘ且慰撫シ以テ其神氣ヲ安靖セシメツ、遠方ヨリ數次本騎銃ヲ點放シ之ニ嗣テ暗ニ緩ニ其響聲ニ近迫セシメ竟ニ之ニ慣習シ始ムルハ復ヒ之ヲ班列内ニ加ヘ入レ騎上ノ已ニ他ノ馬伴ニ教習セル同教法ヲ以テ之ヲ教演スヘシ

○雅馬既ニ本騎銃又ハ輕騎銃ノ連放ニ慣習ノ驚駭セサルハ步兵數名ヲ將テ開濶セル調馬場又ハ演武場ノ一端ニ配列シ又雅馬ノ騎士ノ百羅屯隊ヲ將テ之ニ對

向セル一端ニ布列ス此ニ於テ其步兵一齊ニ順次ヲ照シテ點放スル事數回其間ニ騎士ヲノ望ンテ前進セシムルヲ要ス但其騎士ノ百羅屯隊前進ノ之レニ近迫シ其間相距ル一二十五巴子五丈一分ニ至テハ步兵其點放ヲ休止ス而シテ其騎兵ノ百羅屯隊停立メ馬ヲ休憩セント欲セハ愈ニ前進ノ其步兵ニ密接スヘシ

○又此教節ヲ以テ全ク列及綿多陣ノ馬ヲ教習スルヲ要スルハ列及綿多陣ノ諸位百羅屯隊ヲ以テ各隊順次ニ之ヲ教習スヘシ

○騎操大都督ノ職ヲ掌ル大長官ハ此教節教習ノ時ハ始終其教場ニ出テ之ヲ監督シ以テ其教導精謹ニ整嚴錯亂セサルヤ之ヲ證定スヘシ

○凡ソ騎士極メテ注意ノ其馬火藥ノ逆射ニ觸レ擊レサルヨウニ防護スルヲ要ス

○又馬ヲノ歩雄騎旗ノ廢動鼓聲其他都テ諸般挑戰ノ鳴

響ニ慣レシルヲ安スヘシ

○騎馬操練ノ號令

○騎馬操練ノ號令之ヲ分ツテ三種トス即チ左ノ如シ

○示動ノ號令是レ意ヲ着ケ「ダフト、アクト」ヲ云

○準備ノ號令是レ動作將ニ發セントスルヲ前知セシムル令ヲ云フ

按スルニ譬ヘハ「ライトド」ト「トダ左ール」ト令

スル時「ライド」トハ裝填スル準備ノ令ナルガ如シ

○發動ノ號令是レ「行進」又ハ「立定」ト唱フル令ヲ云フ

○意ヲ着ケト云フ號令ハ各種活動ノ號令ニ先タチテ之

ヲ發シ以テ「勒馬」豫行「靜定」注意スル示動ノ爲ニス

○「行進」ト云フ號令ハ之ヲ聽クニ非サレハ兵士舉動スル

ヲ許サス又「立定」ト云フ號令ハ之ヲ聽クニ非サレハ立

定スルヲ禁ス此令アル所ハ嗣テ「右」又ハ「左」ト令ス此ニ

於テ始テ徑チニ右向又ハ左向ノ立定スヘシ

○横隊ヨコタテ弧圓マツマツ四分一輪廻マワリノ其横線之ヲ照シテ折破スル所

ハ各部ノ敵師徑チニ下條ヲ思唯スルヲ要ス即チ兵士

已ニ右方ニ輪廻シタル所ハ「立定」ト唱へ又「左」方ニ整列

ト唱フル號令ニ應シテ行フ運動ヲ止メ又已ニ「左」方ニ

輪廻シタル所ハ「右」方ニ整列ト云フ號令ニ應シテ行フ

動作ヲ止ムルヲ要ス

○初メ準備ノ令ヲ以テ別種ノ馬行法ヲ前知セシムル

ナク單ニ「行進」ト令スルヲ聽カバ各靜定セル横隊又ハ

縦隊ニ論ナク一ニ「慢行」ヲ以テ行進ノ他ノ馬行法ヲ行

フヘカラズ○隊伍ノ方向整列ヲ定ムルニハ其列面ヲ

以テ大郷導官員ノ「長箇履」ナガカシ結スニ方向ヲ照シテ之ニ

倚托ヨリカカノ之ヲ定ムヘシト云フ

○騎馬ノ列及綿多陣屯聚ノ法

○屯兵ノ諸束伍一齊兵器ヲ執リ騎士馬ニ上ルヲ要スル

所ハ喇叭フエヲ吹クヘシ此號ヲ聽テ騎士鞍

○若シ又屯兵或休營ノ兵唯一部兵器ヲ執リ馬ニ上ル
 ヲ要スルキハ喇叭手騎兵進發ノ號ヲ吹キ騎兵之ニ應
 シテ鞍ヲ安上スヘシ○騎士裝銃ノ號ヲ吹クハ騎士
 鞍ヲ安上シ行李ヲ結駕シ啣韁ヲ安定シ而シテ諸騎各其
 馬ヲ厩外ニ牽出スナク厩内ニ在テ之ヲ手ニ執ルヘシ
 ○馬ニ上ルノ號ヲ吹クハ各位ノ大長官員ト長官員其
 部下ノ騎士ヲ出サシメ列間ノ距離六巴子寸六尺二分開キ
 タル戰隊ヲ編制シ其令辭ヲ讀ミ揚ケ馬ニ上ラメ之ヲ
 監督スヘシ○已ニ此大長官員ト長官員其告狀ヲ其
 工巴屈尼隊ノ司令官ニ告示メ後司令官其大守把長ヲ
 以テ其部局ヲ屯聚シ且ツ之ヲ監督セシムヘシ
 ○把協官ハ已其告狀ヲ工巴屈尼隊ノ乘馬加比丹ヨリ收
 領シタル后其粵斯加獨龍隊ヲ編制セシムヘシ
 ○上ノ如キ告狀大守把官ヨリ一周輪番ノ小教佐ニ交附

○本邦慶長ノ役ニ一諸侯ノ親兵騎馬筒ト號シ數百騎ノ
 手銃ヲ以テ大ニ戰功ヲ著ス城將難戰退城シテ甚夕之
 ヲ感稱ス熊澤氏碎玉話ノ書ニ見ヘタリ之レ則チ和蘭
 ノ粵斯加獨龍隊ニ相似レリ其利用推テ知ヘシ蓋古今
 ノ名將知士ノ計ル所相同シ而モ近世西洋一般陸戰ニ
 騎馬ノ軍隊稱ニ盛ナリ之レ時勢ノ然ラシム所ナラ
 故ニ走馬ニ熟スル輩ヲ撰ミ其人數ノ多少ニ隨テ一二
 ノ陣隊ヲ備フヘシ凡ソ戰爭ノ要火器隊殺隊手結ノ勝
 負百戰ノ要此ニ外ニ出ルナシ
 但和蘭ノ裝馬并十一勢節裝藥輕騎馬上ニテ發射ス
 ルノ姿制ヲ我本邦ノ姿制ニ替正シ其他騎馬操練
 等ノ説示ハ予撮要スル所ノ輕騎操練ノ書ニ詳ナリ

安政三年丙辰秋上澣

熊坂蘭齋識

輕騎加刺別冊 山録終

輕騎加刺別印姿制跋
熊坂君蘭齋翁方伎之暇好讀洋書翁
頃著銃手步操之書繼又著輕騎操練及加
刺別印姿制予受而讀之文簡意達於其執韁
跨鞍之法可謂明了要旨矣蓋

皇國慶元之間雖有騎士放小銃之隊皆火繩銃而較諸當
今雷火銃則其利害復別而使用亦異也然則據西洋騎
操之書而取捨長短以供馳騁之用則豈不便捷哉翁有
見于此而著此篇也於韜鈴之學可謂有一大裨益矣從
事此業者能讀而注心此篇則於御法思過于半云
安政三年丙辰秋日 樗園長山貫撰



輕騎加刺別印姿制跋
余刀圭餘事好讀韜鈴家之書孫子之變化戚子之紀
律我

皇國之陸戰皆可謂盡善矣然華蠻之兵制自不同器械
亦隨而有今古之異故知彼知己而謀勝筭者兵家之
樞要也蘭齋茲著據於和蘭尤方上馬之例而更換於
我

本邦右方上馬之姿制以舉示騎士執韁跨鞍之法則可
以知為其要務也嗟乎蘭齋之用心與世之喜詞藝術
虛文以禍梨棗者何啻霄壤哉看者勿忽云
安政丙辰夏日 松前 櫻井權 誌

